

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02231

研究課題名(和文) 複合国家イギリスの形成と地域的連鎖 多元的地域世界の解明

研究課題名(英文) Formation of the British Composite State and the Regional Connections

研究代表者

岩井 淳(IWAI, Jun)

静岡大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：70201944

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「複合国家イギリス」の形成過程を、イングランドだけでなくウェールズやスコットランド、アイルランド、アメリカ植民地といった諸地域の動向に注意して考察した。代表者の岩井、分担者の山本信太郎、仲丸がウェールズ史に即し、分担者の小林がスコットランド史に即し、分担者の山本正、那須、竹澤、菅原秀二がアイルランド史に即し、分担者の道重がアメリカ植民地に即して実証研究を継続した。分担者の辻本と菅原未宇は、それぞれ軍隊と教育をテーマとし、共同研究に加わった。その際留意したのは、各地域を別個に扱うのではなく、地域連鎖という観点から各地域間の相互作用を重視し、関係史的アプローチを心掛けたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来は、絶対王政とピューリタン革命と名誉革命の原因・展開・帰結という視点からイングランド中心に語られることの多い16-18世紀のブリテン諸島史を、本研究は、ウェールズやスコットランド、アイルランド、アメリカ植民地といった諸地域まで視野を広げて考察した。この点に最大の学術的意義を認めることができる。研究メンバーは、国内と海外で史料調査を行い、科研費を用いて連合王国での調査に従事した。代表者の岩井もロンドン大学歴史研究所を中心に史料調査を行うことができた。2022年度は共同研究を結実させ、11月に本科研の成果として『複合国家イギリスの地域と紐帯』刀水書房を刊行したことを付記しておきたい。

研究成果の概要(英文)：This study examines the formation process of the "composite state of Great Britain," paying attention to developments not only in England but also in Wales, Scotland, Ireland, and the American colonies. Principal Investigator Jun Iwai and Co-Investigators Shintaro Yamamoto and Hideki Nakamaru focused on Welsh history, Co-Investigator Maiko Kobayashi focused on Scottish history, Co-Investigators Tadashi Yamamoto, Kei Nasu, Hiroyuki Takezawa, and Shuji Sugawara focused on Irish history, and Co-Investigator Ichiro Michishige continued empirical research on the American colonies. Co-Investigators Satoshi Tsujimoto and Miu Sugawara joined the joint research, focusing on the military and education.

In doing so, they were careful to take a relational-historical approach, emphasizing the interactions among the regions from the perspective of regional linkages, rather than treating each region separately.

研究分野：イギリス近世・近代史

キーワード：ブリテン史 複合国家 イングランド ウェールズ スコットランド アイルランド アメリカ植民地
地域と紐帯

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本科研・基盤B「複合国家イギリスの形成と地域的連鎖 多元的地域世界の解明」(研究代表者は岩井淳)による共同研究は、2017年度から開始され、コロナ禍による2年間の延長期間を入れて計6年間にわたり継続された。本科研は、最終年度にあたる2022年の11月に、共同研究の成果として『複合国家イギリスの地域と紐帯』を出版することができた。この本は、2012年に刊行された前書・岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会 プリテン国家の創出』(ミネルヴァ書房)の続編という性格をもっている。前書もまた、科研による共同研究の成果であった。以下では、第一に研究開始当初の背景、第二に本科研の研究手法、第三に本科研の研究目的、第四に本科研の研究成果を記しておきたい。より詳細は、岩井淳・道重一郎編『複合国家イギリスの地域と紐帯』(刀水書房、2022年)を参照していただきたい。

第一に、本科研の成果である論集は、前書の出版から、ちょうど10年目となる2022年に刊行された。前書が17世紀を中心に論じたのに対して、本科研は16～18世紀という長期の視座を設け、そこからブリテン複合国家の形成を考察している。研究開始当初の背景として触れるべきは、2012年からの10年間に、複合国家論にとって見逃せない学術的・現実的な進展があったことであろう。

それらは、本研究にヒントを与え、論集刊行を推し進める原動力となった。最初に学術的な背景から述べよう。2012年以降、日本語で書かれたものに限っても豊かな成果を見た。何より特筆すべきは、複合国家論の古典ともいべきJ・H・エリオット、H・G・ケーニヒスパーガラの翻訳論文を含む論集(古谷大輔・近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』山川出版社、2016年)が出版されたことである。歴史学と思想史を架橋する岩井淳・竹澤祐文編『ヨーロッパ複合国家論の可能性』(ミネルヴァ書房、2021年)の刊行も付記すべきであろう。

国別に見ると、ブリテン諸島史では、2009年から始まったラングフォード監修(鶴島博和日本語版監修)『オックスフォード ブリテン諸島の歴史』全11巻(慶應義塾大学出版会、2009～15年)の出版が完結した。中東欧を舞台にしたハプスブルク帝国史では、複合国家論を視野に収めた大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門』(昭和堂、2013年)と大津留厚編『「民族自決」という幻影』(昭和堂、2020年)が刊行された。また、主権国家論の影響が強いフランス史にあっても、仲松優子『アンシアン・レジーム期フランスの権力秩序』(有志舎、2017年)が現れた。スペイン史でも、立石博高編『スペイン帝国と複合君主政』(昭和堂、2018年)と立石博高『歴史のなかのカタルーニャ』(山川出版社、2020年)が登場した。これらによって、主権国家から国民国家へという従来の見解とは異なるヨーロッパ史理解の道筋が、確実に現れてきたように思われる。

こうした学術的背景に加え、現実にかきた国際的な出来事も、複合国家論への関心呼び覚ましている。例えば、2014年9月のスコットランド独立を問う住民投票、16年6月の連合王国のEU離脱を問う国民投票、20年1月の連合王国のEU離脱実現といった一連の出来事は、近世に成立した複合国家の枠組みを再び浮かび上がらせた。EU離脱＝「ブレグジット」は、一部で主張されるような主権国家への回帰という単純な見方では説明がつかないだろう。なぜなら「ブレグジット」の結果、スコットランドがEU復帰を求め、連合王国からの離脱を求めるといった複雑な展開が予想されるからである。連合王国解体の問題は、それが成立した歴史的過程に目を向けさせ、ブリテン近世史の再検討を促している。

2. 研究の方法

本科研による研究会は、イギリス革命史研究会のメンバーを中心に、2017年度に発足した。当初の構成員は13名であった。基盤Bの共同研究としては比較的大所帯であったが、近世のブリテン諸島を中心に複合国家の歴史をたどるという手法を共有することができ、その年の4月から研究会を開始した。本科研による研究方法是、以下で示すように、研究代表者と研究分担者を有機的に組み合わせ、各人の役割を明確にした共同研究の遂行と行うことができる。具体的には、代表者の岩井淳と分担者の山本信太郎、仲丸英起、指昭博がウェールズの視点から、分担者の小林麻衣子がスコットランドの視点から、分担者の那須敬、山本正、竹澤祐丈、菅原秀二がアイルランドの視点から、分担者の道重一郎、大西晴樹がアメリカ植民地の視点から、それぞれ近世ブリテンの複合国家を検討した。途中から本科研の分担者に加わった菅原未宇と辻本諭は、それぞれ教育と軍隊の観点から複合国家の紐帯を考察した。研究会は合計10回開催され、厳しいながらも有意義な時を過ごすことができた。

- 第一回研究会 2017年4月30日、神奈川大学にて執筆予定者全員が構想を報告
- 第二回研究会 2017年8月11～13日、国際基督教大学にて合宿形式で岩井淳、山本信太郎、仲丸英起、小林麻衣子、那須敬、山本正、菅原秀二、菅原未宇、辻本諭、道重一郎が報告
- 第三回研究会 2018年2月16～17日、京都大学にて指昭博、竹澤祐丈、大西晴樹が報告
- 第四回研究会 2018年9月29～30日、神奈川大学にて岩井、小林、菅原(未)、辻本が報告
- 第五回研究会 2019年2月21～23日、東洋大学熱海研修センターにて合宿形式で山本(信)、仲丸、指、那須、山本(正)、竹澤、菅原(秀)、道重、大西が報告
- 第六回研究会 2019年9月9～11日、北海学園大学にて岩井、山本(信)、仲丸、菅原(未)、辻本が報告
- 第七回研究会 2020年2月22～24日、大阪経済大学にて指、小林、那須、山本(正)、竹澤、菅原(秀)、道重が報告
- 第八回研究会 2020年9月12～13日、オンライン方式で岩井、山本(信)、仲丸、小林、菅原(未)、辻本が報告
- 第九回研究会 2021年2月20～21日、オンライン方式で那須、山本(正)、竹澤、菅原(秀)、道重が報告
- 第一〇回研究会 2021年9月17～19日、オンライン方式で執筆者全員が報告

しかしながら、研究会を続けるうちに、共同研究は、二つの問題と直面することになった。最初の問題は、2020年春から猛威を振るようになったコロナ禍のため、対面式研究会を継続することができなくなったことである。2020年2月の第七回研究会までは、なんとか対面式を続けることができたが、それ以後は、オンライン方式に切り替えることを余儀なくされた。また、構成員の何人かが予定していた海外調査も、コロナ禍のために実施が困難となってしまった。ただし、第七回までに対面式の研究会を続け、議論を深めていたので、相互の役割分担などを見通せていたのは不幸中の幸いであった。最終段階はオンライン方式を用いて、ある程度まで研究者間の意思疎通を図ることができた。

次の問題は、共同研究の期間、構成員の中に大学の要職に就く者が現れ、研究の継続が困難になったことである。すでに指は、2017年度から神戸市外国語大学の学長を務めていた。これに加えて、大西が2019年度から東北学院大学の学長に就任することになった。私たちの研究会は、同時に二人の学長を擁するという稀有なものとなった。山本正と菅原秀二も、長期にわたり大学の要職を務めていた。だが、大学の管理職は多忙を極め、学術研究と両立させるのは

容易ではない。大西は、当初、アメリカ植民地まで視野を広げ、複合的なブリテン帝国史を描く予定であったが、2019年度以降、科研による共同研究から離脱することになった。また、指も近世ウェールズのアイデンティティ研究に取り組んでいたが、諸般の事情により論集への寄稿をあきらめることになった。二名は、共同研究にとって、代替の利かない貴重なメンバーただけに、残念に思っている。

3. 研究の目的

本研究は、近世のブリテン諸島とアメリカ植民地を対象に、複合国家の成立過程を論じるものである。本研究の目的は大きく3つにまとめられる。

第一に、本科研は「ブリテン国家」という全体像からいったん離れ、地域に視点を移して近世のブリテン諸島史を考察した。その中でもウェールズとアイルランドは、重点的に掘り下げられた。近世のウェールズ、スコットランド、アイルランドは、イングランドと関わる中で、どのような歴史をたどったのだろうか。この点の解明が第一の目的である。

第二に、本科研は、地域を出発点にしながらも、そこから複合国家のあり方を検討した。その際、少しでも動的なアプローチとなることを目指し、諸地域の関連を問う「紐帯」や「地域連鎖」という概念に着目した。地域から見た複合国家の特色は、いかなるもので、どのような「紐帯」が機能したのであろうか。留意すべきは、統合が進んだと言われるウェールズの事例と、そのように言われないアイルランドとの対比であろう。近世のアイルランドは、ウェールズやスコットランドに比べて、いかなる経験を有したのであろうか。この点の検討が第二の目的である。

第三に、本科研は、地域の多様性を示すと同時に、複合国家ブリテンの統合過程で見られた特色を何点か提示した。統合の「紐帯」は、16世紀から18世紀にかけて、どのように変遷し、王権や議会以外にも教育や軍隊、貿易活動などは、「紐帯」として、どのような機能を果たしたのかを明らかにする。この点の考察が第三の目的である。

4. 研究成果

以下では、上述の3つの目的に照らして、研究成果を確認したい。第一に、近世のウェールズ、スコットランド、アイルランドは、地域ごとに異なる特色をもっていたが、16~17世紀の政治的・宗教的出来事に巻き込まれ、各地域とも大きな変容を経験した。本科研の岩井淳、山本信太郎、仲丸英起の研究は、16~17世紀のウェールズを対象に、合同、宗教改革、ウェールズ議会を扱った。それらの議論は多岐にわたるが、総じて言えば、近世のウェールズがイングランドと統合される中で、その特色を失ったのではなく、むしろウェールズの独自性が発揮された点を指摘した。一方で、近世のスコットランドを論じたのが小林麻衣子の研究である。ここでは、16~17世紀スコットランドにおけるブリテン人意識を俎上に載せ、ブリテン人意識とスコットランド人意識が共存し、両者が重層的に折り重なっていたことが示唆された。ウェールズの場合も、スコットランドの場合も、イングランドから多大な影響を受けたが、両地域の独自性や特色は、消えることなく存続したと言えるだろう。これに対して、那須敬、山本正、竹澤祐丈、菅原秀二の研究は、16~17世紀のアイルランドについて考察した。那須と山本は、17世紀前半のアイルランドが政治や宗教においてイングランドと深刻な亀裂を経験したことを指摘する。山本が示したように、17世紀中葉のピューリタン革命期のアイルランドは、カトリック同盟が影響力を増し、大陸ヨーロッパのカトリック勢力とつながっていた。しかしながら、竹澤と菅原が論証したように、アイルランドを見るイングランドの眼差しのなかには、力

づくでの統合ではなく、宗教的対立を乗り越えようとする思想が存在した。竹澤はジョン・デイヴィスの法思想を、菅原はウィリアム・ペティの経済思想を主に取り上げる。このようにブリテン諸島における各地域の状況は多様であったが、大きくまとめると、近世ウェールズでは「統合のなかの独自性」が、近世スコットランドでは「統合のなかの重層性」が見られた。これに対して近世アイルランドでは、イングランドとの政治的・宗教的分裂が支配的であったが、一部の思想家からは宗教に代わる紐帯が提唱された。これまでの研究は、ウェールズやスコットランドでは「順調な統合」、アイルランドでは「深刻な分裂」という対比を強調する傾向にあったが、本科研は、単純な対比論をとらず、ウェールズ、スコットランド、アイルランドには、統合と、独自性や分離の要素が、それぞれに存在したことを指摘した。

第二に、本科研は、ブリテン諸島を結びつける紐帯の機能にも留意した。16世紀以降に、複合国家をまとめる役割を果たしたのは王権やプロテスタントの宗教、議会などであった。この点は、ウェールズとイングランドの関係を論じた岩井、山本信太郎、仲丸が説得的に示している。しかし、17世紀になると宗教は、統合よりも、むしろ地域間の反目や対立を助長する要因となり、三王国戦争の主たる原因ともなった。この点については、アイルランドとイングランドの亀裂を描いた那須と山本正が掘り下げている。紐帯は、ブリテン諸島の中心地域、つまりイングランドから発せられる傾向にあった。これに対して、「地域連鎖」は、1638年以降の「スコットランド革命」や1641年のアイルランド反乱が周辺地域からブリテン諸島各地へと波及していった過程を説明するだろう。さらに「地域連鎖」は、中心部による改革の経験を他地域に移植する際にも用いられた。その実例は、岩井が示したように、16世紀前半にウェールズ合同を達成したイングランドが、この経験を同時代のアイルランドに適用しようとしたプロセスに認めることができる。同じく、17世紀初頭の同君連合以降、イングランドはスコットランドとの合同を促進するために、16世紀のウェールズ合同の経験を参考にした。このように「地域連鎖」は、諸地域間の関係を解き明かすという利点があるだろう。「紐帯」が、イングランドと他地域との関係を見るのに適しているのに対して、「地域連鎖」は諸地域間の関係を照らし出し、時系列での変化をたどるのに適していると言えるかもしれない。これまでの研究では、イングランドが王権や議会を用いて周辺地域の統合を進めたというイメージが支配的であったが、本科研は、ウェールズ、スコットランド、アイルランドごとに対応が異なっており、イングランドだけでなく、周辺からの視点を交えるべきであることを強調した。

第三に、本科研は、地域の多様性を示すと同時に、複合国家ブリテンの統合過程で見られた特色をも提示した。統合の「紐帯」は、17世紀から18世紀にかけて、王権や議会以外にも広がり、様々な機能を発揮した。菅原末宇、辻本諭、道重一郎の研究は、教育、軍隊、貿易活動が、17～18世紀の紐帯としてブリテン諸島やブリテン帝国をつなぐ役割を果たしたことを示している。とくに辻本は、名誉革命以後の長い18世紀を対象とし、陸軍が地域を越えた人的結合関係をつくり上げたこと、兵舎システムがアイルランドから始まりブリテン諸島全体に及んだことを指摘している。この点は、地域連鎖の事例としても興味深い。こうしてブリテン国家は多様な地域を包摂しながら、様々な紐帯を張りめぐらし、地域連鎖も伴って、徐々に統合力を増していったと言えるだろう。これまでの研究は王権や議会といった政治的紐帯を重視してきたが、本科研では、教育や貿易活動といった社会的・経済的紐帯にも目配りし、そうした多様な紐帯が機能することによって、「ブリテン国家」の各地域をつなぎ止めたことを提起した。

本研究の成果である『複合国家イギリスの地域と紐帯』は、第一部でウェールズを中心に、第二部でアイルランドを中心に考察した。そのため近世のスコットランドの検討は、手薄になったことを認めざるを得ない。今後はスコットランドについても、ウェールズやアイルランドと同様の知見を深めることが求められるだろう。この点は、今後も意識して追究すべき重要な課題であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計27件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 岩井 淳	4. 巻 34号
2. 論文標題 世界史の視点から見る「歴史総合」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本歴史学協会年報』	6. 最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井 淳・山田一雄	4. 巻 70号-1
2. 論文標題 ジョン・リルバーンの迫害体験と宗教思想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『静岡大学人文論集』	6. 最初と最後の頁 109-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩井 淳	4. 巻 24巻11号
2. 論文標題 世界史の視点から考える「歴史総合」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『学術の動向』	6. 最初と最後の頁 50-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井 淳(Jun Iwai)	4. 巻 22号
2. 論文標題 The State of History Education in Local Universities: The Case of Shizuoka University	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アジア太平洋論叢』	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 山本 正(Tadashi YAMAMOTO)	4. 巻 Vol. 7
2. 論文標題 Tudor's Twin 'Reformations' of Ireland and the 'Pale': 'Semi-periphery' in the Early Modern English/British History	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『The East Asian Journal of British History』	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山本 信太郎	4. 巻 200号
2. 論文標題 聖ウィニフリッドの泉とモスティン家: 近世ウェールズのジェントリについての覚え書き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『神奈川大学人文研究』	6. 最初と最後の頁 139-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 道重 一郎	4. 巻 45-1
2. 論文標題 18世紀イングランド南部農村地域の店舗主(下)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東洋大学経済論集』	6. 最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 道重 一郎	4. 巻 45-2
2. 論文標題 18世紀初期イングランド南部農村地域の店舗経営とロンドンの役割(上)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東洋大学経済論集』	6. 最初と最後の頁 137-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本 諭(Satoshi TSUJIMOTO)	4. 巻 22号
2. 論文標題 Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東洋大学人間科学総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田澤 晴子・辻本 諭	4. 巻 68巻2号
2. 論文標題 満蒙開拓団の体験を学校教育でどう教えるか 日本近代海外移民史の学習を踏まえて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲丸英起	4. 巻 975号
2. 論文標題 イングランド1628年議会における議員と選挙区との関係 強制借入金に対する抵抗者の議員選出と議会活動	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『歴史学研究』	6. 最初と最後の頁 1-17頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仲丸英起	4. 巻 新84号
2. 論文標題 全国議会創設期における各国の代表観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『史潮』	6. 最初と最後の頁 5-20頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林麻衣子	4. 巻 46号
2. 論文標題 17世紀スコットランドにおける「北ブリテン」意識	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『CALEDONIA』	6. 最初と最後の頁 1-8頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林麻衣子	4. 巻 117輯
2. 論文標題 スコットランドにおけるブリテン意識とプロテスタント帝国：1540年 1651年	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『防衛大学校紀要人文科学分冊』	6. 最初と最後の頁 1-17頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 道重一郎	4. 巻 44巻2号
2. 論文標題 18世紀イングランド南部農村地域の店舗主 トーマス・ターナーの営業活動を中心に(上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東洋大学経済論集』	6. 最初と最後の頁 19-37頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西晴樹	4. 巻 157号
2. 論文標題 ウィリアム・キッフィンとジョン・ロック 交友・取引関係の記録が意味するもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『明治学院大学経済研究』	6. 最初と最後の頁 1-17頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 指昭博	4. 巻 265号
2. 論文標題 18世紀イングランド北部におけるカトリック教徒	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 39-48頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本論	4. 巻 127編12号
2. 論文標題 結びつきの場としての軍隊 — 八世紀イギリス陸軍将校の人的つながりに注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『史学雑誌』	6. 最初と最後の頁 39-64頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻本論	4. 巻 67巻2号
2. 論文標題 軍隊と一般の人々をどうつなぐか 英国国立陸軍博物館 (NAM) の新たな試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』	6. 最初と最後の頁 39-48頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原未宇	4. 巻 818号
2. 論文標題 一六六六年ロンドン大火の要因の再検討 「大火」化の社会的背景と復興過程における変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『歴史評論』	6. 最初と最後の頁 51-65頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井淳	4. 巻 13号
2. 論文標題 20世紀前半の台湾文化協会と民族運動 蔣渭水の有機体的台湾観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『静岡大学人文社会科学部アジア研究』	6. 最初と最後の頁 3-17頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲丸英起	4. 巻 63号
2. 論文標題 近世イングランド議会史研究の現在 Parliamentary History誌M・A・R・グレイヴズ特集号に寄せて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『北海学園大学人文論集』	6. 最初と最後の頁 79-120頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 仲丸英起	4. 巻 78巻1号
2. 論文標題 ミッド・テューダー期イングランド下院議員の選出様態 選挙区移動の数量的分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『立教大学史苑』	6. 最初と最後の頁 143-166頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本信太郎	4. 巻 78巻1号
2. 論文標題 エドワード6世治世初年のロンドンにおけるフランス国王フランソワ1世の葬儀	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『立教大学史苑』	6. 最初と最後の頁 229-248頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林麻衣子	4. 巻 126編5号
2. 論文標題 回顧と展望：ヨーロッパ 近代 イギリス（前半）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『史学雑誌』	6. 最初と最後の頁 323-326頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西晴樹	4. 巻 71集
2. 論文標題 「セクテ」原理と「信教の自由」への道 バプテスト派貿易商人W.キップフィンの場合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『キリスト教史学』	6. 最初と最後の頁 128 - 152頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田澤晴子、辻本諭、古田修一郎、早川万年	4. 巻 66巻2号
2. 論文標題 高大連携の視点からみた歴史学習の課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』	6. 最初と最後の頁 19-26頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件（うち招待講演 15件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 蒋渭水「臨床講義」の今日的意義 20世紀前半の台湾文化協会と民族運動
3. 学会等名 シンポジウム「台湾夢2049 超現代臨床講義」於・台北（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「三つのブリテン革命」を考える ピューリタン革命・名誉革命・独立革命
3. 学会等名 初期アメリカ研究学会例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 三つのブリテン革命再考 独立革命期におけるピューリタン革命・名誉革命の受容
3. 学会等名 イギリス革命史研究会例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 英米のピューリタニズムとコモンウェルス
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会第17回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 近世史から「歴史総合」を考える
3. 学会等名 東海中学・高校土曜市民講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 ブリテン近代史研究の3つの焦点 千年王国、複合国家、歴史教育
3. 学会等名 岩井淳先生退職記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 仲丸英起
2. 発表標題 複合国家ブリテンにおける「ニュース革命」の意義 ウィン家文書にみる情報伝達様態
3. 学会等名 イギリス革命史研究会例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本正
2. 発表標題 世界史的観点からみたアイルランド1922年 自由国成立100周年にちなんで
3. 学会等名 日本アイルランド協会主催関西公開講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本信太郎
2. 発表標題 ウェールズ語聖書の誕生とウィリアム・モーガン
3. 学会等名 日本ケルト学会・東京研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 ジョン・デイヴィス(1569-1626)のアイランド論再考
3. 学会等名 日本イギリス哲学会関西支部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原秀二
2. 発表標題 ビューリタニズム・千年王国研究
3. 学会等名 岩井淳先生退職記念シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 梅田百合香『ホッブズ リヴァイアサン』に関するコメント
3. 学会等名 経済学史研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹澤祐丈
2. 発表標題 J・G・A・ポーコックの複合国家論の特徴とその可能性
3. 学会等名 第47回 日本イギリス哲学会 研究大会・公募セッション
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 辻本諭
2. 発表標題 近世史から「歴史総合」を考える
3. 学会等名 東海中学・高校土曜市民講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原未宇
2. 発表標題 文法学校から見た近世ブリテンの複合性
3. 学会等名 中国四国歴史学地理学協会2021年度大会 西洋史学部会(オンライン開催)（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原未宇
2. 発表標題 17、18世紀ロンドン郊外におけるリヴァリ・カンパニの文法学校運営
3. 学会等名 イギリス都市・農村共同体研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井 淳
2. 発表標題 近代化と私たち テキスト構想案 改訂版
3. 学会等名 高等学校歴史教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 淳(Jun IWAI)
2. 発表標題 The Situation of Local Universities: The Case of Shizuoka University
3. 学会等名 歴史教育国際会議(Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality in August 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 淳
2. 発表標題 16世紀前半のイングランド・ウェールズ合同 国際関係、いくつかの紐帯、ブリテンへの影響
3. 学会等名 複合国家科研の研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 淳
2. 発表標題 K. MacKenzie, The Solemn League and Covenant of the Three Kingdoms and the Cromwellian Union をめぐって
3. 学会等名 複合国家性科研の研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 淳
2. 発表標題 イギリス革命から考える革命の連鎖史
3. 学会等名 愛知県高等学校社会科研究会主催の講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 淳
2. 発表標題 イギリス革命とフランス革命をつなぐ
3. 学会等名 第2回革命比較史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本 信太郎
2. 発表標題 イングランド宗教改革とウェールズ辺境評議会
3. 学会等名 中四国歴史学地理学協会2019年度大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本 信太郎
2. 発表標題 イングランド宗教改革と大学
3. 学会等名 第42回大学史研究セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原 未宇
2. 発表標題 聖職？ 労働者？ 専門職？ 16、17世紀イングランドにおける学校教師の社会的地位
3. 学会等名 2019年度東海大学史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 近代化と私たち テキスト構想案 改訂版
3. 学会等名 高等学校歴史教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 世界史の視点から見る「歴史総合」
3. 学会等名 日本学術会議主催の公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 「近代化」から考える「歴史総合」
3. 学会等名 静岡歴史教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 第3部会での司会とコメント
3. 学会等名 日英韓歴史家会議(The 1st British-East Asian Conference of Historians in September 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本正
2. 発表標題 Tudor's twin 'Reformations' of Ireland and the 'Pale': 'Semi-periphery' in the early modern English / British state
3. 学会等名 日英韓歴史家会議(The 1st British-East Asian Conference of Historians in September 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林麻衣子
2. 発表標題 A King of Great Britain: Political Thought of James VI and I
3. 学会等名 Monarchy and Modernity since 1500 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 歴史学・歴史教育の「分断」を越えて
3. 学会等名 新潟県高等学校教育研究会地歴公民部会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 イギリス史研究と歴史教育
3. 学会等名 近世イギリス史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 Comparative History of the two Declarations of Independence: The Births of the Democratic Republic of Viet Nam and the United States of America
3. 学会等名 ハノイ国家大学世界史学科での授業モデル試行(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩井淳
2. 発表標題 Beyond the Divisions between History and History Education: The Case of Shizuoka University
3. 学会等名 グローバル展開プログラム第3回研究会(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 那須敬
2. 発表標題 イングランド長期議会と反教権主義
3. 学会等名 英仏合同革命史研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大西晴樹
2. 発表標題 「洗礼派」バプテスト派の記述をめぐって
3. 学会等名 キリスト教史学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 辻本諭
2. 発表標題 結びつきの場としての軍隊 18世紀イギリス陸軍将校の人的つながりに注目して
3. 学会等名 近現代史研究会第115回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 辻本諭
2. 発表標題 Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century
3. 学会等名 Institute of Human Sciences Open Seminar (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 岩井 淳、竹澤 祐文編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 ヨーロッパ複合国家論の可能性	

1. 著者名 岩井淳、岡田健、川喜田敦子、君島和彦、木村茂光、戸川点、日高智彦、茂木敏夫、安井崇、油井大三元	4. 発行年 2022年
2. 出版社 浜島書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 資料と問いから考える歴史総合	

1. 著者名 岩井 淳、山崎 耕一編、岩井淳、菅原秀二、那須敬ほか執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 352
3. 書名 比較革命史の新地平 イギリス革命・フランス革命・明治維新	

1. 著者名 岩井 淳、道重一郎編、岩井淳、山本信太郎、仲丸英起、小林麻衣子、那須敬、山本正、竹澤祐丈、菅原秀二、菅原未宇、辻本諭、道重一郎執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 複合国家イギリスの地域と紐帯	

1. 著者名 北海学園大学人文学部世界遺産研究班、仲丸英起ほか執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 マイナビ出版	5. 総ページ数 244
3. 書名 世界遺産とは何か さまざまな「物語」を読み解く	

1. 著者名 道重一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋大学出版会	5. 総ページ数 346
3. 書名 イギリス消費社会の生成 18世紀の都市化とファッションの社会経済史	

1. 著者名 指 昭博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 288
3. 書名 キリスト教と死	

1. 著者名 君塚 直隆編、山本 信太郎、那須 敬、辻本 諭ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 よくわかるイギリス近現代史	

1. 著者名 那須 敬	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 イギリス革命と変容する 宗教	

1. 著者名 大西 晴樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 298
3. 書名 海洋貿易とイギリス革命	

1. 著者名 山本 正	4. 発行年 2017年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 180
3. 書名 図説 アイルランドの歴史	

1. 著者名 上野 正治、保立 道久、小林 純、小野塚 知二、平出 尚道、斎藤 修、村松 晋、柳父 圀近、梅津 順一、河合 康夫、石井 寛治、肥前 栄一、近藤 正臣、道重 一郎、須永 隆、高嶋 修一、齋藤 英里	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 319
3. 書名 大塚久雄から資本主義と共同体を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	仲丸 英起 (Nakamaru Hideki) (00736887)	北海学園大学・人文学部・教授 (30107)	
研究分担者	山本 正 (Yamamoto Tadashi) (10200817)	大阪経済大学・経済学部・教授 (34404)	
研究分担者	山本 信太郎 (Yamamoto Shintaro) (10645344)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 麻衣子 (Kobayashi Maiko) (20440109)	防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群）・人文社会科学群・教授 (82723)	
研究分担者	菅原 秀二 (Sugawara Shuji) (40216297)	札幌学院大学・人文学部・教授 (30103)	
研究分担者	道重 一郎 (Michishige Ichiro) (40239273)	東洋大学・経済学部・教授 (32663)	
研究分担者	那須 敬 (Nasu Kei) (40338281)	国際基督教大学・教養学部・教授 (32615)	
研究分担者	竹澤 祐丈 (Takezawa Hiroyuki) (60362571)	京都大学・経済学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	指 昭博 (Sashi Akihiro) (90196197)	神戸市外国語大学・外国学研究所・名誉教授 (24501)	
研究分担者	辻本 諭 (Tujimoto Satoshi) (50706934)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	研究分担者の期間は2021-22年度
研究分担者	菅原 未宇 (Sugahara Miu) (10645310)	東海大学・文学部・准教授 (32644)	研究分担者の期間は2021-22年度

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大西 晴樹 (Onishi Haruki) (90160564)	明治学院大学・経済学部・教授 (32683)	研究分担者の期間は2017-18年度

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関